

自立活動の指導に関する研究

一 多様な教育的ニーズのある児童生徒等の系統的な学びを目指して 一

主 幹・指導主事 伊藤 太一

主 幹・指導主事 原 満登里

主 査・指導主事 樋川 陽子

キーワード 自立活動 個別の指導計画 系統性

I 主題設定の理由

令和4年の文部科学省の調査によると、小中学校の通常の学級に在籍する児童生徒の中で「学習面又は行動面で著しい困難を示す」割合は8.8%、「学習面で著しい困難を示す」割合は6.5%、「行動面で著しい困難を示す」割合は4.7%、「学習面と行動面ともに著しい困難を示す」割合は2.3%という結果が示された。そこからは、以前にも増して特別支援教育やユニバーサルデザインの視点を取り入れた指導・支援が必要とされる状況が考えられた。

特別支援教育は、一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。これまでの取組により特別支援教育への理解と対応が進むとともに、多様な教育的ニーズのある児童生徒等が増加していることや、特別支援教育を受ける児童生徒等が増加していること、また、国における近年の特別支援教育に関する動向等を踏まえ、一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう、連続性のある多様な学びの場の一層の整備・充実を推進する必要がある。

中でも自立活動は、各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担い、心身の調和的発達の基盤を培うものであり、通常の学級や高等学校においても系統的な指導を行う必要がある。現行の学習指導要領・自立活動編の改訂時の審議会等において、「心身の健康のためには、自分の状態を把握し、周囲へSOSを出せることが必要である」ということから、その内容に「1 健康の保持（4）障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」が新たに加えられた。これは、全ての子供にとって必要なことであり、全ての子供に提供できるよ

う取り組む必要があると考えられる。

そこで本研究では、学校現場における課題やニーズを把握し、それに応じた「自立活動の指導ガイドブック」及び「指導パッケージ」の作成に取り組むこととした。それにより、全ての教師が自立活動の視点をもって児童生徒等の指導に当たるための一助となること、そして、全ての児童生徒等が系統的な学びを積み重ねていくための一助となることを目指し、本研究主題を設定した。

II 研究の目的

多様な教育的ニーズのある児童生徒の自立活動の指導に当たって活用できるガイドブックを作成し、実践場面における効果的な個別の指導計画の作成や、教員間での有効な連携につなげることにより、自立活動の指導の充実を図る。

また、小中高等学校及び特別支援学校におけるガイドブックの活用について検証し、ガイドブックの改善を図るとともに、高等学校における自立活動の在り方について、指導パッケージの作成を通して探ることにより、児童生徒のニーズや発達段階に応じた系統的な学びの充実につなげる。

III 研究の内容と方法

本研究は令和5年度から6年度までの2年計画で進め、2年間で次の3点に取り組むこととする。

- ① 「自立活動の指導ガイドブック（改訂版）」の作成
- ② 「高校生への自立活動の指導パッケージ」の作成
- ③ ガイドブック及び指導パッケージの発信

1年次には、山梨県総合教育センター相談支援センター（以下、「本センター」という。）が平

成 26 年 3 月に発行した「自立活動の指導ガイドブック」をもとに、特別支援教育を受けている児童生徒だけでなく、通常の学級に在籍する多様な教育的ニーズのある児童生徒も含めて活用できるよう、内容の改善を図る。その際、県内の教職員を対象とした特別支援教育に関するニーズ調査を行い、学校現場のニーズを踏まえた改善となるようにする。また、高校生への自立活動に関する文献調査を行い、それを踏まえて、「自立活動の指導」を必要としている高校生に対し、本センターにおける教育相談並びに自立活動の指導を行う。その際、生徒の在籍する高等学校と連携して指導支援を行うようにする。その実践を積み重ねながら高等学校における自立活動の指導の在り方について探るとともに、「高校生への自立活動の指導パッケージ」として活用しやすい形を探っていく。そして 2 年次には、ガイドブックと指導パッケージを併せて、県内の各学校に向けて発信できるようにする。

1 令和 5 年度（1 年次）の研究

- ・平成 23～25 年度に取り組んだ研究の成果物である「自立活動の指導ガイドブック」を、現行の学習指導要領に基づいて整理し、通常の学級に在籍する発達障害を含めた障害のある児童生徒や、特別な教育的支援を必要とする児童生徒も含めて活用できる内容にする。
- ・県内の全教職員を対象に、特別支援教育に関するアンケート調査を実施する。その結果をもとに特別支援教育に関する現在の取組状況や課題意識等について分析し、学校現場のニーズを把握する。
- ・アンケート調査の結果から考えられる学校現場のニーズを踏まえ、ガイドブックの改善を行う。
- ・令和 1～4 年度に取り組んだ研究の成果物である、特別な教育的支援を必要とする児童生徒の困難さを捉えるための「児童・生徒理解のためのシート」（以下、「チェックシート」という。）をもとに、自立活動の 6 区分 27 項目の視点から実態を捉え直すためのシートを作成する。
- ・高校生を対象とした自立活動の指導についての文献調査を行う。
- ・文献調査を踏まえ、本センターにおける高校生の教育相談や自立活動の指導を行う。

- ・文献調査と指導実践をもとに「高校生への自立活動の指導パッケージ」について検討する。

2 令和 6 年度（2 年次）の研究

- ・自立活動の指導や「自立活動の指導ガイドブック」に関する教員への聞き取り調査等をもとに、指導上の悩みやニーズを把握し、ガイドブックの一層の改善を図る。
- ・高校生への自立活動の指導において、本人の実態やニーズの把握、指導計画の作成、指導案や教材等の作成、指導の評価、改善といった PDCA サイクルを積み重ねる。
- ・文献調査と蓄積した実践事例をもとに、「高校生への自立活動の指導パッケージ」を作成する。
- ・「自立活動の指導ガイドブック」と「高校生への自立活動の指導パッケージ」を併せてデジタルガイドブックとして活用できるようにし、県内の各学校への周知を図る。

IV 研究の実際

1 「自立活動の指導ガイドブック（改訂版）」の作成に向けて

(1) ガイドブックの内容整理

本センター発行（平成 26 年 3 月）の「自立活動の指導ガイドブック」について、まずは現行の学習指導要領に基づいて内容の整理を行った。その際、通常の学級に在籍する児童生徒も含めて活用できる内容にし、全ての先生方にとって見やすく分かりやすいものとなるよう、図表を含めながら、端的に、各学校種を想定して記載した。また、これまでの研究でまとめた「チェックシート」や「教材等の工夫」といった知見を活用できるように、本ガイドブックに取り入れることとした。

(2) ガイドブックの改善に向けたニーズ把握 ア アンケート調査の作成と実施

ガイドブックの改善に向けた学校現場のニーズ把握のため、県内の全校種・全教職員を対象にアンケート調査を行った。本アンケート調査は、山梨県教育委員会で進めている「インクルーシブ教育システム推進」に関する研修に関わって、研修動画視聴後に回答を依頼したものである。

調査内容については、山梨県教育委員会・

特別支援教育・児童生徒支援課指導主事とともに検討を行った。その際、本センターにおける学校訪問や教育相談の中で得られた現場の先生方の実情を踏まえ、質問項目や選択肢の検討を行うようにした。

調査内容としては、所属校種や役職、特別支援教育に関する経験といった、回答者自身に関することに加えて、特別支援教育に関する現在の取組状況や、取組の必要性を感じていることなどについて、選択による回答と自由記述による回答を求めた。

調査結果については、「回答者自身に関する内容」「特別支援教育に関する内容」「『共生社会の担い手』を育む教育に関する内容」の3つに分けて検討したが、今回は特に「特別支援教育に関する内容」に焦点をあてて分析することとした。

イ 校種別の取組状況の分析

まず、特別支援教育に関する質問項目のうち、「先生方の勤務校で現在取り組んでいること（図1）」と「先生方自身がこれまでに取り組んでいること（図2）」についての回答結果をもとに、現在の取組状況についての分析を行った。

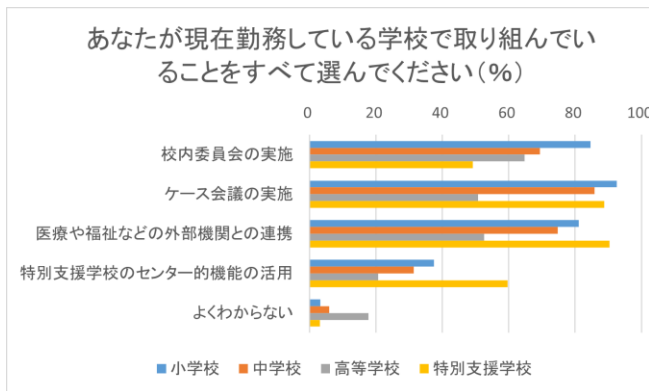


図1 勤務校で現在取り組んでいること

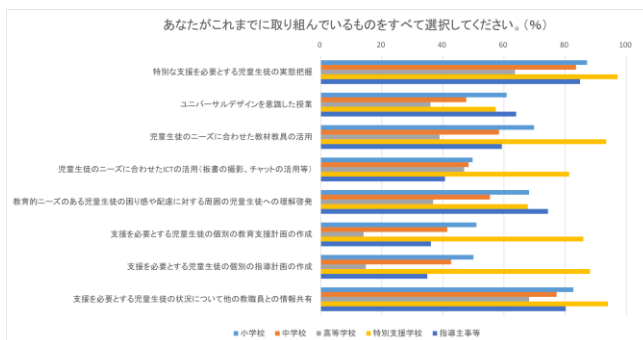


図2 先生方自身がこれまでに取り組んでいること

回答結果を校種別に見ていくと、小中学校では、支援を必要としている児童生徒への個別の対応に取り組んでいる率が高いことがうかがえる。また、高等学校では、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成率が、他校種に比べると低いことがうかがえる。そして、すべての校種において、校内委員会を含め、教職員間での情報共有の取組率は高いと考えられる。なお、ここに挙げた項目以外の取組としては、「保護者や外部機関との連携」や「特別支援教育に関する研修の実施」が多く挙げられた（自由記述より）。

ウ 校種別の課題意識の分析

次に、「先生方が取組の必要性を感じていること（図3）」についての回答結果をもとに、特別支援教育に関する課題意識についての分析を行った。

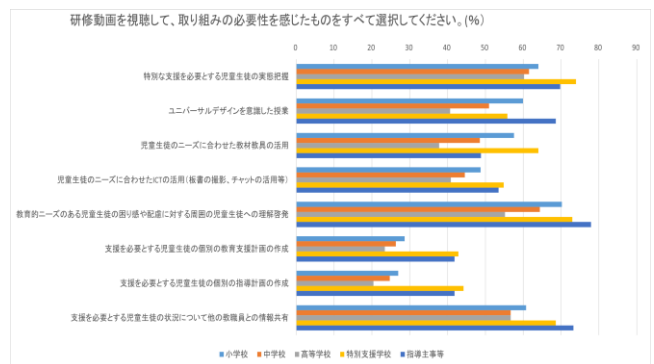


図3 取組の必要性を感じていること

回答結果を校種別に見ていくと、小中学校及び特別支援学校では、「特別な教育的ニーズのある児童生徒の困り感についての、周囲の児童生徒への理解啓発」が特に必要であると考えられていることがうかがえた。また、高等学校では、「ユニバーサルデザインを意識した授業づくり」や「個別の教育支援計画の作成」等、個に応じた指導支援の必要性を挙げる人が増えてきており、先生方の意識の変化がうかがえた。そして、教職員全体では、「ユニバーサルデザインを意識した授業づくり」と「特別な教育的ニーズのある児童生徒の困り感への理解啓発」の必要性を挙げる人が多かった。なお、ここに挙げた項目以外で「必要性が高い」と考えられているものとしては、「保護者や地域への理解啓発」「教職

員の意識改革」「教職員数の増数」「学級編制人数の減数」等が挙げられた（自由記述より）。

エ 各学校のニーズの分析

（自立活動の視点から）

前述の特別支援教育に関する取組状況や課題意識についての分析をもとに、自立活動の視点で学校現場のニーズを考えたとき、一つは「児童生徒のことについて情報共有するためのツール」があるとよいこと、もう一つは「普段の授業づくりに生かせる取組の具体例」があるとよいことが考えられた。そこで、自立活動の指導ガイドブックには、「児童生徒理解や実態把握のためのチェックシート」「個別の教育支援計画や指導計画の作成に関する資料」「通常の学級でも取り入れられる、自立活動の視点を生かした実践事例」の3つを新たに加えることとした。

（3）ガイドブックの充実に向けた検討

ア 自立活動の視点で児童生徒の実態を捉え直すためのシートの作成

ガイドブックに追加する「児童生徒理解や実態把握のためのチェックシート」について、自立活動の指導開始に向けた活用を考え、内容の検討を行った。

このチェックシートは、本センターの令和1～4年度の研究において、児童生徒の困難さをより客観的に把握するために作成し、活用してきたものである。「小学校用（図4・図5-①・図6）」と「中学校・高等学校用（図4・図5-②・図6）」の2種類があり、どちらも全部で3枚のシートで構成されている。1枚目は児童生徒の基本情報について記述するシートとなっており、生育歴や関係機関、本人・保護者の思い、現在の校内支援状況のほか、「本人の得意とすること・がんばっていること」などについても記述することにより、児童生徒への理解を一層深められるようにしている。2枚目は学習面に関する項目について4段階でチェックするシート、3枚目は行動面に関する項目について4段階または3段階でチェックするシートとなっている。児童生徒との関わりの深い複数の教職員等が意見・情報交換しながらチェック

していくことにより、学習面は、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の6領域について、行動面は、「不注意」「多動性・衝動性」「対人関係やこだわり等」の3領域について、児童生徒の困難さの程度を数値化して捉えられるようにしている。

| sheet 1 「児童・生徒の基本情報について」 | | 記入者 | （学年・学級） |
|---|---------------------------------|----------------------------------|---|
| 学校名 | | | |
| 児童生徒のイニシャル | ○ ○ (男・女) | 年 月 日 | 所属学級 |
| 児童生徒のことについて把握される内容を、漏し支えない範囲で、簡潔・具体的に記述してください。 ○学習面・認知面(読み書き・計算、学習の習慣性、学力、知的発達の状態、理解力・判断力など) | | | |
| ○コミュニケーション・対人関係面(大人との関係、友達との関係、言葉使いや話し方、活動などの状況、トラブルの発現など) | | | |
| ○行動面・情緒面(自主行動、集団活動への参加状況、注意力・集中力、こだわり、パニック、情緒の安定、自己統制など) | | | |
| ○身体面・運動面(身体能力、作業面、器用/不器用など) | | | |
| ○学習面および教科書の学習面(授業から始まる学習、教科書、教科書の理解、支援での配慮、特別支援学級等の利用がある場合はその期間、その他の学習事項があれば記述してください) | | | |
| ○医療機関・相談機関等とのつながり(通院・診察/療育施設、診察/療育施設、相談機関、相談員、相談室等を行っている場合は実施年月と概要、市町村の相談支援、SOSの利用、センターの機能の活用等) | | | |
| ○校内委員会での対応、現在の校内支援状況 | | | |
| ○以下のような課題・行動・配慮等がある場合はチェックしてください。 | | | |
| 学習上の課題 | <input type="checkbox"/> 集中力がある | <input type="checkbox"/> 出席している | <input type="checkbox"/> 宿題・身体運動 |
| <input type="checkbox"/> チョーク | <input type="checkbox"/> 座席近距離 | <input type="checkbox"/> 授業(どもり) | <input type="checkbox"/> 読書習慣 |
| <input type="checkbox"/> 不安 | <input type="checkbox"/> 緊張 | <input type="checkbox"/> やんちゃ | <input type="checkbox"/> 見守り・視力・聴こえ・聴力 |
| <input type="checkbox"/> フォック | <input type="checkbox"/> 不安 | <input type="checkbox"/> 集中力 | <input type="checkbox"/> 感情表現(光・音・表情、匂い等) |
| <input type="checkbox"/> 作業面・器用低下 | <input type="checkbox"/> 器用 | <input type="checkbox"/> 器用 | <input type="checkbox"/> 非行行為 |
| <input type="checkbox"/> 読書習慣 | <input type="checkbox"/> 不安 | <input type="checkbox"/> 器用 | <input type="checkbox"/> 読書習慣 |
| <input type="checkbox"/> チョーク | <input type="checkbox"/> 不安 | <input type="checkbox"/> 器用 | <input type="checkbox"/> 読書習慣 |
| <input type="checkbox"/> チョーク | <input type="checkbox"/> 不安 | <input type="checkbox"/> 器用 | <input type="checkbox"/> 読書習慣 |
| チェックがある場合、分かっている範囲で簡潔ですので、下に概要を記述してください。 | | | |
| ○本人の得意とすること・がんばっている事項について | | | |
| ○本人・保護者の悩み・困っていること、今後の希望について | | | |

図4 児童生徒の基本情報の記述シート

| 学習面 | | 評価点 | 領域計 |
|---|--|--------------|-----|
| * (○:ない, 1:まれである, 2:ときどきある, 3:よくある) の4段階で回答 | | | |
| 質問項目 | | | |
| 聞くこと | ・聞き間違いがある(「知った」を「行った」と聞き違える) | 2 | 12 |
| | ・聞きもらしかる | 2 | |
| | ・個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい | 3 | |
| 話すこと | ・話し合いが難しい(話し合いの流れが理解できず、ついていけない) | 2 | 6 |
| | ・適切な速さで話すことが難しい(たどたどしく話す、とても早口である) | 1 | |
| | ・ことばにまつたりする | 0 | |
| 読むこと | ・単語を識別したり、短い文で内容的に乏しい語をうる | 0 | 11 |
| | ・思いつままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい | 2 | |
| | ・内容をわかりやすく伝えるのが難しい | 3 | |
| 書くこと | ・初めて出てきた語や、音読あまり使わない語などを読み通せる | 3 | 14 |
| | ・文中の語句や行を抜かしたり、または繰り返して読む | 3 | |
| | ・文章の要点を正しく読みとることが難しい | 3 | |
| 計算する | ・読みにくい字を書く(字の形や大きさが揃っていない、まっすぐに書けない) | 2 | 13 |
| | ・独特の筆順で書く | 3 | |
| | ・漢字の細かい部分を書き間違える | 3 | |
| 推論する | ・学年相応の文章の意味やまじりについて理解が難しい(長よかかさの比較、15cmは150mm、ということ) | 3 | 12 |
| | ・学年相応の図形を描くことが難しい(丸やひし形などの図形の模写、見取り図や展開図) | 0 | |
| | ・事象の因果関係を理解することが難しい | 3 | |
| 学習面 | | ※基準 各領域12点以上 | |
| 行動面 | | | |

図5-① 小学校用・学習面のチェックシート

| 学習面 | | | |
|---|---|-----|----|
| ※(0:ない, 1:まれである, 2:ときどきある, 3:よくある)の4段階で回答 | | | |
| 質問項目 | 評価点 | 領域計 | |
| 聞くこと | ・聞き間違いがある(「知った」を「行った」と聞き違える) | 1 | 5 |
| | ・聞き間違いがある | 1 | |
| | ・個別に言われると聞き取れるが、集団場面では難しい | 1 | |
| | ・指示の理解が難しい | 1 | |
| 話すこと | ・話し合いが難しい(話し合いの流れが理解できず、ついでいけない) | 1 | 5 |
| | ・適切な速さで話すことが難しい(たどたどしく話す。とても早口である) | 0 | |
| | ・ことばにつまったりする | 0 | |
| | ・単語を羅列したり、短い文で内容的に乏しい話をする | 0 | |
| 読むこと | ・思いつづままに話すなど、筋道の通った話をするのが難しい | 2 | 19 |
| | ・内容をわかりやすく伝えるのが難しい | 3 | |
| | ・切めて出てきた話や、普段あまり使わない話などを読み聞かせる | 1 | |
| | ・文章を理解するのに何度も読み返す | 3 | |
| 書くこと | ・音読が遅い | 3 | 4 |
| | ・文章を読むことはできるが、内容が頭に入らない | 3 | |
| | ・文章の要点を正しく読みとることが難しい | 3 | |
| | ・読みにくい字を書く(字の形や大きさが整っていない。まっすぐに書けない) | 0 | |
| 計算すること | ・文章を書く際、漢字をあまり使わない | 0 | 3 |
| | ・漢字の細かい部分を書き間違える | 0 | |
| | ・体系的な類りが目立つ(主語と述語が対応していない、順序がおかしいなど) | 1 | |
| | ・限られた量の作文や、決まったパターンの文章しか書かない | 1 | |
| 推論すること | ・思いつづままに書き、筋道の通った文章を書くことができない | 2 | 5 |
| | ・数の表記が正確にできない(三千四百七十八を300047や347と書くなど) | 0 | |
| | ・簡単な数(6+8=14、15-7=8など、九九の範囲の計算)の計算が素早くできない | 0 | |
| | ・四則の混合した式で正しい順序で計算できない | 1 | |
| 学習面 | ・文字や記号(x,y,nなど)を使った計算ができない | 1 | 0 |
| | ・一次方程式が解けない | 1 | |
| | ・数の量的な面が理解できない(数直線の目盛りが分からない、分数の大きさが分からないなど) | 0 | |
| | ・幾つかの事象から数学的な法則が見つけられない(数字の並び、表やグラフの変化から先を予測できないなど) | 2 | |
| 行動面 | ・文章題の解き方の方針(求め方)や式が分からない | 0 | 0 |
| | ・基本的な公式や定理を示されても、それに当てはめて答えを求めていくことができない | 0 | |
| | ・類似点・相違点を見つけれない(図形の性質や問題の解き方などの似ているところ、違うところが分からないなど) | 1 | |
| | ・得られた答えが、日常ではありえない状況でも、変だと思わない | 2 | |

図5-② 中学校・高等学校用・学習面のチェックシート

このチェックシートを、自立活動における「個別の指導計画」の作成段階で活用することを想定し、改良を図ることとした。そして、チェックシートで捉えた「困難さ」の大きな項目や領域から、自立活動の6区分27項目に照らして中心となる課題を捉えられるよう、新たに「自立活動」のシートを加えることとした(図7)。

| 自立活動 | | |
|-------------|--|---------|
| 区分 | 項目 | 評価点 領域計 |
| 1 健康の保持 | (1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること | 0 |
| | (2) 病気の状態の理解と生活管理に関すること | |
| | (3) 身体各部の状態の理解と養護に関すること | |
| | (4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること | |
| | (5) 健康状態の維持・改善に関すること | |
| 2 心安定的 | (1) 情緒の安定に関すること | 0 |
| | (2) 状況の理解と変化への対応に関すること | |
| 3 の人形成 | (1) 他者とのかかわりの基礎に関すること | 0 |
| | (2) 他者の意図や感情の理解に関すること | |
| | (3) 自己の理解と行動の調整に関すること | |
| | (4) 集団への参加の基礎に関すること | |
| 4 環境の把握 | (1) 保有する感覚の活用に関すること | 0 |
| | (2) 感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること | |
| | (3) 感覚の補助及び代行手段の活用に関すること | |
| | (4) 感覚を総合的に活用した周囲の状況についての把握と状況に応じた行動に関すること | |
| | (5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること | |
| 5 身体の動き | (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること | 0 |
| | (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること | |
| | (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること | |
| | (4) 身体の移動能力に関すること | |
| | (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること | |
| 6 コミュニケーション | (1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること | 0 |
| | (2) 言語の受容と表出に関すること | |
| | (3) 言語の形成と活用に関すること | |
| | (4) コミュニケーション手段の選択と活用に関すること | |
| | (5) 状況に応じたコミュニケーションに関すること | |

図7 自立活動のチェックシート

| 行動面 (不注意 多動性・衝動性) | | | |
|--|--|-----|----|
| ※(0:ない、もしくはほとんどない、1:ときどきある、2:しばしばある、3:非常にしばしばある、の4段階で回答) | | | |
| 質問項目 | 評価点 | 領域計 | |
| 不注意 | ・学習において、頻りに注意することができない、または不注意な間違いをする。 | 1 | 7 |
| | ・課題または進捗の感度で注意を集中し続けることが難しい。 | 2 | |
| | ・直接話しかけられたときに聞いていないように見える。 | 0 | |
| | ・指示に従えず、課題や任務をやり遂げることができない。 | 2 | |
| 多動性・衝動性 | ・課題や活動を順行させていることが難しい。 | 2 | 6 |
| | ・学習や活動のような、身体的努力の持続を要する課題を避ける。 | 2 | |
| | ・課題や活動に必要なものをなくしてしまう。 | 3 | |
| | ・気が散りやすい。 | 3 | |
| 人への関わり | ・日々の活動で互に邪魔しあう。 | 2 | 2 |
| | ・手足をさわさわと動かす、またはいすの上でもじもじする。 | 3 | |
| | ・物置、その他、座っていることを要求される状況で座る。 | 1 | |
| | ・不適切な状態で、赤旗に走り回ったり両手を上げる。 | 2 | |
| 人への関わり | ・静かに進んだり静かに活動することができない。 | 1 | 2 |
| | ・「じっとしていない」、またはまるで「エンションで動かされているように」行動する。 | 3 | |
| | ・しゃべりすぎる。 | 3 | |
| | ・質問が終わる前に出し抜けて答へ始めてしまう。 | 2 | |
| 人への関わり | ・順番を待つことが難しい。 | 3 | 0 |
| | ・他人を妨害したり、邪魔をする。 | 1 | |
| | ※評価点0:1は、0点に換算、2・3は1点に換算する。 | | |
| | ※基準 各領域12点以上、「書くこと」「推論すること」は15点以上 | | |
| 行動面 (対人関係やこだわり等) | | | |
| ※(0:いいえ、1:多少、2:はい、の3段階で回答) | | | |
| 質問項目 | 評価点 | 領域計 | |
| 人への関わり | ・大人がいる、まてている | 0 | 22 |
| | ・音のある言葉や動作を書かれても分らない、言葉通りに受けとめてしまうことがある | 1 | |
| | ・希望の仕方が形式的であり、固執なく話したり、聞き手が聞けなかったりすることがある | 0 | |
| | ・言葉を組み合わせて、自分だけにしか分からないような意味を作る | 0 | |
| 人への関わり | ・誰かに何かを伝える目的がなくても、途端に関係なく声を出す(例:悪を囁らす、喧払い、囁を囁) | 1 | 2 |
| | ・いろいろな話を聞かすが、その話の場面や相手の感情や立場を理解しない | 1 | |
| | ・共感性が低い | 2 | |
| | ・周りが人が困るようなことも、配慮しないで言うてしまう | 2 | |
| 人への関わり | ・友達と仲良くしたいという気持ちはあるけれど、友達関係をうまく築けない | 2 | 0 |
| | ・友達のそばにいないが、一人で遊んでいる | 1 | |
| | ・仲の良い友人がいない | 0 | |
| | ・競技やゲームをする際、仲間と協力することに答えが及びない | 2 | |
| 人への関わり | ・他の子どもたちから、いじめられることがある | 0 | 0 |
| | ・みんなから、「○○博士」「○○教授」と思われている(例:カレンダー博士) | 0 | |
| | ・他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている | 0 | |
| | ・特定の分野の知識を蓄えているが、丸暗記であり、意味をきちんと理解していない | 2 | |
| 人への関わり | ・とても得意なことがある一方で、極端に不得手なものがある | 2 | 1 |
| | ・ある行動や考えに強くこだわることによって、簡単な日常の活動ができなくなる | 1 | |
| | ・自分なりに独断的な目標や手順があり、変更や変化を嫌がる | 0 | |
| | ・特定の状況に拘束される | 2 | |
| 人への関わり | ・執着な行動や考えがある | 1 | 0 |
| | ・執着な感情をしていることがある | 0 | |
| | ・執着な姿勢をしていることがある | 1 | |
| | ・執着な目つきをすることがある | 0 | |
| 人への関わり | ・常識が感じない | 1 | 0 |
| | ・動作やジェスチャーが不審で、まごちないことがある | 2 | |
| | ・容目的でなく、顔や体を動かすことがある | 0 | |
| | ※評価点合計 | 22 | |

図6 行動面のチェックシート

前述の「学習面」と「行動面」の各項目について、自立活動の項目との関連を検討し、結びつけるようにした。その際、項目相互の関連も検討しながら自動で得点化されるようにした。そうすることにより、「学習面」や「行動面」の項目の評価点が、自立活動の各項目や各区分の評価点に反映され、自立活動の指導における中心課題を捉えやすくなると思われる。

イ 自立活動の指導計画の作成時におけるチェックシートの活用

昨年度までの研究からは、児童生徒の実態把握においては、聞き取りや行動観察に加えてチェックシートも活用することにより、困難さの背景にある要因を考えやすくなり、子供の特性やニーズに応じた指導支援方法を検討しやすくなることが分かった。そこで、自立活動の指導においても、有効な指導支援の方針を立てるためのツールの一つとして、

本チェックシートを活用していきたいと考える。自立活動のチェックシートから捉えた児童生徒の中心課題をもとに、指導目標の設定や目標達成に必要な指導項目の選定、指導内容の設定へとつなげていきたい。

2 「高校生への自立活動の指導パッケージ」の作成に向けて

(1) 「高等学校における自立活動の指導」に関する文献調査

山梨県では、県立高等学校2校において通級による指導が行われており、それぞれの生徒の実態やニーズに応じて自立活動の指導が行われている。また、本センターにおいても、面接による教育相談の一形態として、自立活動の指導を必要としている高校生に対し、在籍高等学校と連携しながらその指導を行っている。その際、限られた時間の中でより効果的な指導を行えるよう、「高校生の自立活動の指導」に関する専門性を高めていくことは必要不可欠である。また、生徒の指導にあたる担当者だけでなく、全ての教職員がその意義や目的、基本的な考え方について共通理解をし、在籍学級や在籍学校における指導支援との連続性を考えておくことも必要である。

そこで、まずは文献調査をもとに、高校生の指導における対応手順や留意事項について整理することにした。その内容について以下に記す。

ア 実態把握について

実態把握の段階では、生徒が学習、行動、生活上の様々な側面に困難を有している可能性があることに留意する必要がある。そのため、生徒の状況について多面的に情報収集していくことが求められる。

最初の段階では、生徒一人一人の困難の状況をより簡便に、素早く捉えていくために、チェックリストや情報共有のためのフォーマット等があると効果的である。そして、より詳細に教育的ニーズを検討していく段階では、生徒の指導に関係の深い複数の教職員が連携し、多様な視点で実態把握を行う機会を積極的に設けていくことも大切である。

また、子供の自己認識等の発達過程に照らしてみると、高等学校では生徒本人の意向等

がより一層尊重される必要がある。そのため、実態把握においては、保護者や教師のニーズ以上に生徒自身のニーズがどこにあるのかを見極めることが必要であり、保護者や教師から見た生徒の「苦手なこと」や「できていないこと」ではなく、生徒自身が感じている「必要性」を見極めることが大切である。そして、本人、保護者、教員のニーズや意向、専門家の意見等、様々な立場からの情報を収集し、より妥当な判断を検討していくことが望まれる。

イ 指導すべき課題の整理について

収集した情報を自立活動の6区分に即して整理したのち、指導開始時点において、優先度や緊急度の高いものを中心に課題相互の関連を整理し、中心的課題と指導支援の方向性を導き出すようにする。その際、通常の学級における指導とのつながりを考えながら、通級による指導に期待できることを想定しておくことも重要である。また、支援の方向性としては、本人のもてる力を高める視点からも検討することが大切である。

ウ 指導目標の設定について

個々の実態や教育的ニーズに応じて、個別に指導目標を設定するが、その際、生育の過程で現在の状態に至った原因や背景を明らかにし、これまでの学習状況を振り返ったり、将来の可能性を見通したりしながら設定することが大切である。学年等の長期目標とともに、当面の短期目標を明確に設定することが必要だが、その指導目標自体は最終的なゴールではなく、ゴールと今をつなぐ道筋となっていくもの、生徒自身がゴールへ向かうための道しるべとなるものであることを念頭に置き、単に「苦手なことをできるようにする」といったことだけに留めないことが大切である。

エ 指導項目の選定について

自立活動の内容6区分 27項目の中から、個々の指導目標を達成するために必要な項目を選定する。

オ 指導内容の設定について

選定した項目を相互に関連付け、具体的な指導内容を設定するが、その際、生徒のニーズに合わせて、本人と合意形成を図りながら設定していくことが大切である。また、高等学校における教育の実態と、高校生という発達段階を踏まえた指導内容の検討が重要になる。自立活動の指導が、通常の学級における各教科等の指導と連続性を保ちながら充実していくことが求められる。

具体的な内容としては、小中学校と同様に、「自分に合う学習方法の習得」等の学習に関すること、「対人関係やコミュニケーション能力の向上」等の社会的スキルの獲得に関すること、適応上の課題場面における問題解決能力に関することなど、学習面や生活面に関する内容を取り扱う。そのほか、卒業後の就職や進学といった「進路選択」も高校生にとっては大きなウエイトを占めることから、「社会への接続」、卒業を見据えた「個別のキャリア教育」といった卒業後の適応に関することなども大きな柱になると考えられる。また、「困ったときに相談できる力」や「SOSを発信する力」も自立と社会参加のためには身に付けさせたい力であると言える。

(2) 総合教育センター相談支援センターにおける高校生への自立活動の指導実践

文献調査をもとに、本センターの「高校生こころのサポートルーム」における教育相談並びに自立活動の指導を行った。

申込から自立活動の指導開始までの間には、電話による聞き取り、インテーク面接、必要に応じて心理検査等の実施を通して、これまでの経過や本人のニーズ、保護者の願いなどについて情報収集を行った。それらを整理・検討して指導目標を立てたが、その決定においては、本人の合意を得るようにした。その後、配慮事項や具体的な指導内容・方法については、チーフSC等の専門家からスーパーバイズを受けながら検討し、実施計画を作成した。指導開始後は、毎回、取組の様子等を記録し、評価、改善を図りながら進めるようにした。

今後は、この実践のPDCAサイクルをより円滑に、繰り返し行い、より良い高校生へのサ

ポートにつなげたい。

(3) 「高校生への自立活動の指導パッケージ」作成に向けた検討

ここまでの文献調査や高校生への自立活動の指導実践をもとに、「指導パッケージ」の原案について検討を進めてきている(図8)。

| 区分 | 主な内容と目的 | 関連する自立活動の区分 |
|---|-----------------------------|---------------|
| 1 保健 持康 の | ・具体的な行動目標を立てる | 2. 3. 4. 5. 6 |
| | ・自分の特徴を知る(障害理解、自己理解の促進) | 2. 3. 4. 5. 6 |
| | ・ストレスと上手に付き合う(心理的安定) | 2. 3 |
| | ・予防や病理に関する知識の獲得 | 2. 4 |
| 2 な 心理 安的 的 | ・リラックスをする | 5 |
| | ・アンガーマネジメント | 1. 3 |
| | ・不安のコントロール | 1. 3. 4. 5 |
| | ・うまくいかない行動を分析する(機能分析) | 3. 4. 6 |
| 3 の 人間 形成 関係 係 | ・人との適切な距離感(社会技能訓練) | 2. 6 |
| | ・約束を守るためのコツ(自己調節の促進) | 2. 4. 6 |
| | ・ピア・サポート | 2. 6 |
| | ・相手への気遣い | 2. 6 |
| 4 環 境 の 把 握 | ・自分の得意、不得意を知る(自分の感覚についての把握) | 1. 2. 3. 6 |
| | ・スケジュール管理の仕方を知る | 1. 2. 3. 6 |
| | ・認知特性に応じた学習方法の習得 | |
| | ・知識や情報の補充 | |
| 5 身 体 の 動 き | ・認知機能強化トレーニング | |
| | ・ビジョントレーニング(視覚機能の向上) | 4 |
| | ・手指の巧緻性の向上 | |
| | ・不器用さに対するの自分らしい動きを知る | 1. 4 |
| 6 ケ コ ミ ュ ニ シ ョ ン | ・発達性強調運動障害とは | 1. 4 |
| | ・日常生活技能にかかわる動きの獲得 | 1. 4 |
| | ・他者を理解する | 1. 2. 3. 4 |
| | ・上手に自己主張ができるようにする | 1. 2. 3. 4 |
| 6 ケ コ ミ ュ ニ シ ョ ン | ・相談できる人、場所を見つける | 1. 2. 3. 4 |
| | ・会話のマナー | 1. 2. 3. 4 |
| | ・アサーション | 1. 2. 3. 4 |
| | | |

図8 高校生の自立活動の指導内容

全部で37の指導内容を取り上げ、それを自立活動の6区分に分類・整理して示すようにした。それにより、本人の困難さが大きいと考えられる区分をもとに、指導内容を選定しやすくなるのではないかと考える。また、指導内容を6区分に分類してはいるものの、あくまでも中心となる区分がそれだということであり、他の区分との関連もあることから、指導内容ごとに関連があると考えられる他の自立活動の区分も示すようにした。それにより、本人の教育的ニーズに応じた指導内容について、他の区分との関連も考え併せながら選定しやすくなるのではないかと考える。

今後は、指導内容ごとに、簡単な指導案や使用するワークシートなどを作成・蓄積し、「高校生への自立活動の指導パッケージ」としてまとめていく。

V 研究の成果と今後の課題

今回の研究では、自立活動の指導について、アンケート調査による先生方のニーズ把握や、高校生の指導に関する文献調査及び指導実践等を行い、それを自立活動の指導ガイドブックとしてまとめるよう取り組んできた。その成果としては以下の2点があげられる。

- 全教職員を対象としたアンケート調査をもとに学校現場のニーズをつかむことにより、学校のニーズに応じた内容をガイドブックに取り入れ、改善を図ることができた。
- これまでの研究成果や自立活動の指導実践について、「系統的な指導」という観点から再検討し、より活用しやすい形にするよう考えることができた。

また、今後の課題としては以下の2点があげられる。

- 「ガイドブックが、児童生徒の実態把握や自立活動の授業づくりに役立つものとなっているか」といった視点で調査を実施し、現在の状況を確認するとともに、自立活動の指導において現場の先生方が感じている課題点や指導上の悩みについて把握し、より先生方のニーズに合ったガイドブックにするよう、内容について一層吟味していく必要がある。
- 自立活動の実践事例や指導パッケージといった授業づくりの参考となる資料を追加し、ガイドブックをより活用しやすいものとするこで、全ての先生方が「自立活動」の視点をもって指導・支援を行うことができるようにし、全ての児童生徒が、小学校から高等学校まで系統的に必要な学びを積み重ねていくことができるようにする。

これらの取組を経て、令和6年度には、自立活動の指導ガイドブックを総合教育センターのホームページや研修会、教育相談等を通して周知し、山梨県内の学校現場で活用されるようにしていきたい。そして、子供たち一人一人のニーズに応じた指導支援の一層の充実を図っていきたいと考える。

終わりに、本研究の推進にあたり、山梨大学の吉井勘人教授、清水徳生客員教授には御指導・御助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 文部科学省
(令和元年5月20日)
特別支援学校教育要領・学習指導要領解説
自立活動編(幼稚部・小学部・中学部・高等部)
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
(令和4年10月25日)
「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」実施状況
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
(令和4年12月13日)
通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
- 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課
(令和2年3月)
初めて通級による指導を担当する教師のためのガイド
- 山梨県総合教育センター特別支援教育担当
(平成26年3月)
自閉症・情緒障害特別支援学級を中心とした自立活動の指導ガイドブック
- 愛媛県総合教育センター特別支援教育室
(令和2年3月)
特別支援学級における自立活動の指導ガイドブック
- 岡山県総合教育センター
(平成27年2月)
自立活動ハンドブック ―知的障害のある児童生徒の指導のために―
- 岡山県総合教育センター
(令和元年8月)
自立活動ハンドブック ―知的障害のある児童生徒の指導のために― 改訂版
- 小関俊祐 他
(2020年2月)
自立活動の視点に基づく高校通級指導プログラム 認知行動療法を活用した特別支援教育

- ・昭和大学発達障害医療研究所／昭和大学附属烏山病院
(2015年3月)
発達障害専門プログラムマニュアルⅠ・Ⅱ
 - ・昭和大学発達障害医療研究所／昭和大学附属烏山病院
(2015年3月)
発達障害専門プログラムワークブックⅠ・Ⅱ
 - ・昭和大学
(平成27年3月31日)
平成26年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業「成人期発達障害者のためのデイケア・プログラム」に関する調査について
 - ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
(平成30年3月)
高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブックおさえておきたい8つの課題と課題解決のための10のポイント
 - ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所
(令和2年3月)
高等学校教員のための「通級による指導」ガイドブックおさえておきたいQ&A
 - ・山梨県教育委員会
(平成29年3月)
教職員のための「通級による指導」ガイドブック
 - ・山梨県教育委員会
(平成30年3月)
教職員のための「通級による指導」ガイドブック～通級による指導と通常の学級との連携～
 - ・小島道夫ほか
(2008年11月)
発達障害の子どもがのびる！かわる！「自己決定力」を育てる教育・支援
 - ・宮本信也
(2019年1月20日)
学習障害のある子どもを支援する
 - ・シャロン・A・ハンセン
(2022年7月15日)
10代の心理をサポートするワークブック①
インスタントヘルプ！10代のための実行機能トレーニング
 - ・高山恵子
(2022年2月10日)
やる気スイッチをON！実行機能をアップする37のワーク
 - ・NPO フトゥーロ LD 発達相談センターかながわ
(2011年9月2日)
あたまと心で考えよう SST（ソーシャルスキルトレーニング）ワークシート～社会的行動編～
 - ・NPO フトゥーロ LD 発達相談センターかながわ
(2012年6月8日)
あたまと心で考えよう SST（ソーシャルスキルトレーニング）ワークシート～自己認知・コミュニケーションスキル編～
 - ・NPO フトゥーロ LD 発達相談センターかながわ
(2014年9月1日)
あたまと心で考えよう SST（ソーシャルスキルトレーニング）ワークシート～思春期編～
 - ・湯澤正通
(2023年3月30日)
ワーキングメモリがぐんぐんのびるワークシート
学習の基礎をつくる記憶機能トレーニング
- 【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】
- | | | |
|------|------|-------|
| 山梨大学 | 教授 | 吉井 勘人 |
| 山梨大学 | 客員教授 | 清水 徳生 |
- 【総合教育センター 研究アドバイザー】
- | | | |
|----------|-------|------|
| 相談支援センター | センター長 | 玄間 修 |
|----------|-------|------|